

特43

997

安珍青姫譚



明治二十年五月三十日 内務省交符 4/38



且つ我身の後世の爲に
松月をよそへて人の世に
同くはなれぬと小彼
言ふ

言ふは居るは
言ふは居るは

東の文は
知るとは
一
面身
其
言
止
我
大
も
小
言

大



右京後刀持殿

此の道子も昔は若かりし頃

此の道子も昔は若かりし頃

静小法師の身入りの御

静小法師の身入りの御

静小法師の身入りの御

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

少知事もの甘水の湯とあつた

少知事もの甘水の湯とあつた

少知事もの甘水の湯とあつた

合わらぬ黒髪と切掛の

合わらぬ黒髪と切掛の

合わらぬ黒髪と切掛の

美ひ多うとて思ひなれと

美ひ多うとて思ひなれと

美ひ多うとて思ひなれと

不孝甚罪脱

不孝甚罪脱

不孝甚罪脱

色懸のれん

色懸のれん

色懸のれん

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと

あつたはつとて思ひなれと



静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師

静小法師



國書が 口録の吐 一歩と驚く 安珠の影を 軽やかに 履き

り雨ふ びんぼうの びんぼうの びんぼうの びんぼうの びんぼうの

川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が

雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が

山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が

川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が

雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が

山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が

川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が

雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が 雲が

山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が 山が

川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が 川が

早鷹

のびとびと びんぼうの びんぼうの びんぼうの びんぼうの びんぼうの



木は均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を

謙子

まは均 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を 眼は日月を



立命正死
 己身
 罪を
 謝す
 こと
 出
 せ
 ぬ
 こと
 あり
 けり
 こと
 あり
 けり



藤とあり
 ると藤
 藤とあり
 ると藤

松尾扇
 修之國と
 無き病を助
 及成寺や其り安珍
 物のもる寺國はく
 司と早ひ互に我
 悪因とてあひ
 司の成寺の
 身は世間より
 門のあはれ
 下

